

巖本嘉志子（若松賤子）の家庭観

武田 京子

(岩手大学教育学部)

1. 目的

巖本嘉志子(1864-1896)は、ペンネームの若松賤子として明治の女流文学者、特に「小公子」の翻訳者として著名である。しかし、「閑秀小説家問答」¹⁾のなかで、嘉志子は自分自身を文学者としてではなく教育者としてとらえ、小説については作り方用い方によっては効果のあるもの、ととらえている。野辺地晴江氏²⁾によれば、読者対象は、男女を問わず「女性の地位向上を願うあらゆる人々」であった。一般女性層の読者は母親や将来母親となっていく女性であり、嘉志子の小説は、直接の読者として子どもを考えたのではなく、間接的な教育的効果のあるものとしてとらえていたと考えられる。本研究では、「女流文学者(児童文学者)」としての若松賤子ではなく、教育者・家庭人、いわば実生活者としての巖本嘉志子に見られる家庭観を明確にすることを目的とする。

2. 研究方法

巖本嘉志子(若松賤子)の従来の研究は、「家庭観」そのものを明確にテーマとしたものは、見あたらないが、「女学雑誌」や同時期に出版された雑誌を資料として、育児観(母子関係)に着目した研究はある。そこで、本研究はまず、そうした育児観に関する研究を手がかりにして、これまで若松賤子(巖本嘉志子)の家庭観はどのように把握されていたのかを整理してみる。つぎに、嘉志子の家庭観は、どのように形成されていったのかを考察したい。その際の形成過程については「伝記」³⁾と嘉志子の「女学雑誌」等に掲載された論説を中心にたどってみたい。

3. 結果及び考察

(1)「若松賤子」の家庭観の研究(従来の研究によってとらえられている嘉志子の家庭観)

若松賤子と「女学雑誌」の関連については、本田和子の研究⁴⁾、子ども観については同氏の「若松賤子解説」⁵⁾をあげることができる。また、近代的母親像の形成とコミュニケーション・メディアとの関わりについては沢山美果子⁶⁾の研究がある。以上の先行研究から、巖本嘉志子(若松賤子)の家庭観は、嘉志子自身の実体験(幼児体験)の中で形成されたものを土台に自己形成の過程の中での生活経験を取り入れ、伴侶としての善治の家庭観から影響を受けて形成されていったも

のであり、その内容は、当時の形成されつつあった中産階級の婦人だけでなく女子教育関係者に読まれ影響力を持っていったと考えることができる。

(2) 嘉志子の家庭観の形成

嘉志子はその生涯の間の名前の変更は嘉志子の環境や心境の変換の区切りの時期と一致する。その時期に従って嘉志子の家庭観の形成の様子をたどることができるであろう。

①松川甲子(1864-1870) 会津藩の隠密の子として生まれ、干支にちなんで甲子となづけられた。出生時に父親は不在であった。会津は、「家訓」が武士のみならず女・子どもにもゆきわたり、幼いときから「ならぬものはならぬ」としつけられて育つ。戊辰戦争時、4歳の嘉志子は母祖母ともに戦火を逃れたが、その最中に妹みやが生まれる。戦後一家は離散した。

②大川かし(1870-1885) 嘉志子は横浜在住の生糸交易商人の大川甚兵衛の養女として託される。当時の最新の教育の場であったキダーさんの学校(後のフェリス女学院)へ通うようになるが、心をなごませるような暖かい生育環境と云うことはできなかった。3年の空白の後、寄宿施設の整ったフェリス女学院へもどった。万事西洋風の共立女学校に対して、フェリスは質素な日本風で一般学生であっても5分の1の費用で済み、さらに全額無料の給費生制度があったという⁷⁾。嘉志子はここで生まれて初めて「平和」と帰ることのできる家のない寂しさを経験する。寄宿生活は個人として生きるスタートの場であったと同時に、「家庭(ホム)を考え初める契機となった。キダーは生徒を大家族と呼び嘉志子の精神面での母親といえることができる。卒業後、母校の和文教師として経済的にも自立した。

③島田嘉志子(1885-1889) 甲子を嘉志子(嘉之子)と改字したのは自己肯定の現れと見ることができる。実父の上京を契機に嘉志子は、島田を名乗り復籍する。しかし、一家の経済的な担い手は嘉志子のみであった。ミラー夫人の勧める縁談を自分の意志によって断るが、その直後に咯血する。嘉志子を精神的に支えたものは、中島夫妻や巖本善治との親交である。この頃嘉志子は、女子教育の現状と自立の手段

について論説を書いている⁸⁾。

④ 巖本嘉志子(1889-1896) 嘉志子の結婚は従来の「家」の介入はなく、因習を排した新しいものである。嘉志子は、「自己を保留して夫には隷属しない」と宣言し⁹⁾、実用的な妻になるよりも自己の内なる声に忠実になるほうを選択した。(「雑嫁」「国民之友」163号の主人公に嘉志子は自分を重ね合わせていたと考えられる。)しかし、嘉志子は家事能力に欠けていたのではなく、後の「女学雑誌」掲載の実用記事の内容¹⁰⁾や、フェリスにおいても家事経済を教えていた事実から考えて、意識の面で家事よりも文筆活動を優先させたと考えて良いだろう。言文一致体を用いるようになるが、それは、内なる声を忠実に表現する方法として有効であった。長女の誕生を「我等ただ二人なりしホームに先頃客人の来まして、始めてまことの家族を作しつるなり。」¹¹⁾記すように、子どもの誕生は嘉志子に理想の家庭が着実に建設されていくことを実感させ、それが母胎となりやがて社会の浄化につながると考えていた。翻訳と並行して「女学雑誌」の家政欄に「子供につきて」¹²⁾を連載し、「小言のいひ様」¹³⁾等の子育ての具体例を示していった。4人目の妊娠に際して、「私の命はお産まで」と覚悟をする。胎児の生命によって生かされていると感じていたのである。嘉志子が死後子ども達を託していくのは、会津の逃げまどいのさなかに生まれた妹みやである。死を予期しながらも文筆と家政は嘉志子の人生の基盤であり、「家庭(ホム)」を素材にした作品を残している。以上のように嘉志子の家庭観①、②、③は④へと継承され実生活上において実を結んだのである。

(3) 嘉志子の家庭観の位置付け

嘉志子の家庭観はその形成過程を追うことによって明確になったように実生活に見られる家庭像と見事に一致しているといえるが、当時の社会状況の下でどのような意味あいをもっていたのか考えてみたい。

嘉志子が活躍した時期は大日本帝国憲法発布(1889)、教育勅語発布(1890)、日清戦争(1894)と続き、1898年に民法典が施行されるまでの時期であるが、いわゆる民法典論争が展開していた時期であり、一方では古い家族制度の論潮があり、一方では新しい家庭を志向する個人の自由意志を持つ家庭像が求められていた。やがて封建的な家族制度を基調とし、家族や社会における女性の不平等を容認したまま明治民法は制定された。石田氏は、「社会一般では、天皇制國家の公権的イデオロギーが支配していた時代であったが、『家』あるいは『家族』ではなくて

『家庭』という観念がすでに現れ、一般にも広く用いられていた」¹⁴⁾時代であり、女性に関する問題は、知識人の中で論じられてはいたものの、嘉志子のように経済的自立を基盤として家庭における夫と妻の対等な関係を論ずるものは少なかったのである。」と述べている。一般化の例証を家庭を冠した雑誌の発行やそれらに取り上げられる内容の中に認められ、新興の市民階級に「新家庭」をもって「旧日本」の「家」から訣別すべきよう解いている点を論拠としている。「家庭」名の付く雑誌は日露戦争頃から約10年間にわたって集中的に刊行されているが、殆ど大正初期か中期までに姿を消し婦人雑誌へと移行していったが内容は引き継がれていったと、石田氏は考えている。民法には旧式な家制度が残されたまま、女子に対する教育は「高等女学校令」の公布によって女性は社会へ目を向けるのではなく「良妻賢母」という鑄型の中へと押し込まれていく。このような流れの中で嘉志子が「家庭(ホム)」という概念を女性の自立を前提として考えていたことは非常に大きな意味を持っていた。嘉志子の後、新しい女性としての生き方を模索し実行する女性は登場してくる。しかし、観念的な思想は先行してして行くが、嘉志子ほど自分自身の生活の中で具体的に実践していく人は希であった。それは、嘉志子の活動が自分自身の家庭を基盤としていたことと家庭観が一般化していく時流にうまく乗ることができたためと考えられる。

引用文献

- 1) 女学雑誌207号
- 2) 「『女学雑誌』概観」 野辺地晴江 女学雑誌諸索引 青山なを他 慶応通信 1960
- 3) 「とくと我を見たまえー若松賤子の生涯」 山口玲子 新潮社 1980
- 4) 「『女学雑誌』における『児童』」 本田和子 『お茶の水女子大学女性文化紀要』2号 1981
- 5) 「若松賤子解説」 本田和子 「日本児童文学大系2, 昭和52年, ほるぷ出版
- 6) 「近代的母親像形成についての一考察ー1890-1900年代における育児論の展開ー」 沢山美果子 『歴史評論』323号 1977
- 7) 「明治女性史 上巻 文明開化」 村上信彦 理論社 1969
- 8) 「巖本嘉志子」師岡愛子 龍溪書舎 1982
- 9) "The Bribal Vail" 「女学雑誌」172号
- 10) 「女学雑誌」353, 386 11) 343, 346, 348 12) 273
- 13) 347 14) 福島編 家族 「家族政策と法」1975